秦淮に泊す（杜牧）

煙は　寒水を　籠め　月は　沙を　籠む
夜　秦淮に　泊して　酒家　近し
商女は　知らず　亡国の　恨
江を　隔てて　猶お　唱う　後庭花

煙籠寒水月籠沙　夜泊秦淮近酒家
商女不知亡國恨　隔江猶猶後庭花

解説　秦淮に舟泊りして向こう岸の酒家で妓女の歌う玉樹後庭花の曲を聞き、感慨にふけったことを詠じた詩。

語釈　※秦淮＝河の名。※煙＝もや。※籠＝たちこめる。※寒水＝つめたい川の水。ここは秦淮の河の水をさす。※月籠沙＝月光が白く照らして砂地と区別のつかない様子。※酒家＝料亭。※商女＝酒を勧め歌舞をして客の興を助ける妓女。※亡国恨＝陳の滅亡に対する恨み。※後庭花＝玉樹後庭花という歌曲の名。

通釈　夕もやは冷たい河の水の上にたちこめ、月の光は白々と川岸の砂を照らす。この夜、私は秦淮河に舟泊りをしたのだが、川の向こうは料亭であった。妓女たちは、昔ここに都した陳の国の亡国の恨みのこもる歌とは知らずに、いまなお玉樹後庭花の曲を歌ってにぎやかに騒いでいる。